

甲田の裾

KŌDA NO SUSO



福西征子園長先生 退官記念特集号

2013
新春
1 号

松丘保養園の機関誌

松丘保養園のインターネットホームページ
<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>



甲田の裾 平成25年1号 目次

福西征子園長先生 退官記念特集

新年のご挨拶	1
思い出のアルバム	2
福西征子先生 略歴	5
松丘保養園退官にあたってのご挨拶	
…………… 名誉園長 福西 征子	6
送別の辞(送る会より)	園長 川西 健登 … 10
送ることば(送る会より)	自治会会長 石川 勝夫 … 14
会津の足跡	滝田 十和男 … 15
ありがとうございました	神子澤 悦子 … 20
退官に寄せて	元看護師長 藤嶋 由子 … 21
お疲れ様でした	元事務長 高柳 武正 … 23
思い出	事務長 谷下田喜代志 … 25
園長就任挨拶	園長 川西 健登 … 26
副園長就任のご挨拶	副園長 大野 忠良 … 28
第9回ハンセン病に関する青少年研修会 感想文	29
野の花の微笑み(4)	比良 信治 … 36
自治会日誌・人事異動	43

写真提供：福祉室・編集部

※白樺短歌会はお休みです。

※「『命』あったからこそ」菊池盈は休載中です。

謹賀新年

皆様のご健康とご多幸を心よりお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

平成二十五年 元旦

国立療養所 松丘保養園

園長 川西健登

自治会会長 石川勝夫

職員入園者一同

甲田の裾編集委員会



平成5年4月8日

准看護学校第42期生入学式



平成19年2月9日

新春大茶会



平成24年12月18日「送る会」
スライドショーより



平成24年12月18日「送る会」



平成25年1月4日 離任式

福西征子名誉園長略歴

[学歴]

昭和38年3月 福島県立会津女子高等学校卒業
昭和38年4月 福島県立医科大学医学部医学科入学
昭和44年3月 同 卒業
昭和44年8月 医師国家試験合格
昭和55年 京都大学医学博士

[職歴]

昭和44年4月～昭和45年3月 京都大学小児科学教室で研究に従事
昭和45年4月～昭和48年3月 京都大学小児科学教室医員
昭和48年3月～昭和49年4月 奈良県大和郡山総合病院小児科医長
昭和49年5月～昭和53年3月 京都大学小児科学教室医員
昭和53年4月 国立療養所大島青松園内科医師
昭和58年11月～昭和62年4月 国立療養所大島青松園第2内科医長
昭和59年4月～昭和62年3月 国立療養所大島青松園研究検査科医長
昭和62年4月～平成4年10月 国立療養所多磨全生園第4内科医長
平成4年11月～平成6年3月 国立療養所松丘保養園副園長
平成6年4月～平成24年12月 国立療養所松丘保養園園長
平成25年1月1日 国立療養所松丘保養園名誉園長

[留学等]

昭和54年9月～昭和55年4月 合衆国ワシントンDC AFIP公務留学
日米医学協力フェロー
昭和57年11月～昭和58年6月 同 AFIP研究員
昭和59年9月～昭和60年4月 合衆国ルイジアナ州ツレーン大学研究員

[役職 審議会委員など]

平成13年 ～平成22年 日本ハンセン病学会評議員
平成15年8月～平成24年10月 国立ハンセン病療養所所長協議会副会長
平成16年6月～平成17年3月 ハンセン病資料館施設整備等検討懇談会参加者
平成16年4月～平成17年3月 青森県人権教育・学習推進調査委員会委員
平成19年4月～平成21年2月 国際医療協力研究委託運営委員会委員

[学会会長など]

平成8年10月 第8回コ・メディカル学術集会世話人
平成13年11月 第13回コ・メディカル学術集会会長
平成17年5月～平成18年4月 第78回日本ハンセン病学会会長
平成17年5月 第17回コ・メディカル学術集会会長
平成24年5月 第24回コ・メディカル学術集会会長

松丘保養園退官にあたって ぐあいさつ

国立療養所松丘保養園 名誉園長 福 西 征 子

記憶が間違いないければ、保養園勤務をはじめて勧められたのは平成三年だったと思います。ある日、突然、「青森の松丘保養園へ副園長で赴任して欲しい」と言われた時は、本当に驚きました。しかし、それまで高松市の大島青松園、東京の多磨全生園などへの単身赴任が十年あまり続いていましたので、さらに青森へ転勤することは、京都に住む私の家族には負担が大きすぎました。また、特に、ライフワークにしていた、AFIP(ワシントンDC)およびツールン大学(ニューオーリンズ)における、サルやアルマデロを用いた実験らしいの共同研究を続けたい思いも強く、その旨を伝えてお断りしました。しかし、一年後に、再び、保養園勤務を要請された時は断りきれませんでした。「先生は雪国生まれだから、寒い青森でも大丈夫だろうし、管理職も務まる筈だ」等々、ずいぶん無責任な言い分だとも思いましたが、何よりも、医師不足のために保養園入所者の皆さんの療養生活が脅かされていることは、当時の関係者なら誰でも知っていたことで、「他に赴任できる人はおりませんか」と聞き返すのが精一杯で、平成四年十一月一日付で副園長で保養園へ赴任しました。

保養園へ赴任して一年ほどは入所者の健康状態、医療の在り方などを理解する事で精一杯でした。医師が不足していましたから、一ヶ月に十五日は当直をしていたように思います。専門医が手薄だっ

たため、内科、外科、基本治療科などの各科外来を診て回らなくてはならず、毎日、大層くたびれました。

平成六年に園長になってからは、医師不足を解消しようと、知己を頼って、北海道大学、札幌医科大学、岩手大学、秋田大学、福島県立医科大学、東北大学などの医学部の各医局を訪ねましたが、それらのどこにも保養園に赴任してもよいと言う医師を見つけることができず、心底落胆しました。さらに折をみては弘前大学医学部の各教室にもお願いしましたが、直ぐには良い話を頂くことはできませんでした。

話は前後しますが、平成四年は、国立医療機関の経営改善が本格化した時期で、北海道から始まった改善命令が、次年度は全国の国立病院・療養所に波及しました。改善命令はないものの、保養園もその波に巻き込まれ、事務、福祉、看護、給食など、保養園の全ての職種・職域について、細々と業務見直しをしなければなりませんでした。不自由者棟介護員の当直時間について、当時の庶務班長だった現谷下田喜代志事務長に、得にもならない任務を業務命令として行つて貰ったことは、心苦しい思い出になっています。

一方、らい予防法の改廃問題は、経営改善などとは比較にならない長い歴史がありますが、「廃止」なのか、「改正」なのか、見通しがつかないまま、この時期（平成三年）、全患協（現全療協）が厚生大臣に「らい予防法改正要請書」を提出したあたりから、にわかには世間が騒がしくなりました。大谷見解を経て、厚生省内に「らい予防法見直し検討委員会」が設置されると、日本らい学会（現日本ハンセン病学会）、国立ハンセン病療養所々長連盟（現所長協議会）、弁護士会などが続々と要請書や声明書を出し、世論に訴えました。そのせいもあってか、平成八年に「らい予防法廃止に関する法律」が公布され、予防法に立脚した我が国のらい対策は廃止されることになりました。

しかし、結局、予防法廃止だけでは、明治以来、九十年に及ぶハンセン病予防対策の後始末はでき

ず、平成十三年に「らい予防法違憲国賠訴訟・熊本地裁判決」を迎えるに至りました。この頃が、保養園入所者の皆さんの、日々の安全と安心な療養生活を守ることが、最も困難な時期でした。何日も続けて、過去の入所者のリストに目を通したり、関係者への煩雑な対応に追われたりしましたが、いつも頭から離れなかったのは、書類の整理や処方箋作成、基幹病院への紹介状作成などの、たて込んだスケジュールの合間に、どのようにして病棟回診と外来診療を行うかということでした。夜半に、病棟の重症者のための呼び出しに応じなければならぬ事もしばしばでしたから、体力勝負でもありました。

ただ、幸運だったのは、その前後に、弘前大学医学部から、眼科、外科、内科、耳鼻科、泌尿器科などの常勤、非常勤の医師を安定的に派遣して貰えるようになり、また青森県立中央病院を中心とした基幹病院との医療提携（入院委託治療）が軌道に乗ったことでした。これらのことから、保養園入所者は、一般の人々と同様に、園内医療としてのプライマリーケアと、基幹病院における高度医療の双方を受けることができるようになり、救命率がぐんと上がりました。

特に、眼科の中澤満先生の白内障手術による開眼率は高く、また、福田眞作先生の「J」による上部消化管精査で胃癌や胃潰瘍と診断された入所者の殆どが、青森市民病院や青森県立中央病院で手術を受け、今もって元気に過ごしていることについては、お礼の申し上げようもなく、深く感謝しております。弘前大学第二外科で占められる外科は、試行錯誤を繰り返しながら新しい近代的な外科処置を行うようになり、泌尿器科の古家先生には、何人もの悪性腫瘍の患者さんが助けられました。耳鼻科では、高齢化した入所者の嚥下障害に取り組んで頂き、また、歯科の佐藤先生の御指導は、保養園入所者の口腔環境を一変しました。これらの先生方には、ありがたく、重ねて深謝申しあげます。

平成二十一年に、地域との共生を強く謳った新法「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律・基本法」が公布されて以降、新しく完成した中央センターを中心に据えた「松丘保養園の将来構想」

を立案しなければならぬと考えておりましたが、煩雑な日々の仕事に追われて、案を上梓することができないでいました。ようやく平成二十四年五月のハンセン病市民学会（於保養園）で、「松丘保養園の将来構想（案）」を明らかにし、その後、青森県および青森市医師会と健康福祉部からの承認および、東北厚生局からの認可が得られた事、すなわち平成二十五年四月から、保養園でも（その利用基準に従って）五床の保険診療用病床が利用可能になった事は幸いでした。


この二十年間を振り返ると、夢のような気がします。二十年前は、まだ入所者の皆さんも私も、今より二十歳若く、元気で、さまざまな将来を夢見ていました。今、時が流れて、その「将来の夢」であった、らい予防法廃止、基本法公布、将来構想立案などが現実のものになっていきますが、本当のところ、これらの事実によって、若いころの夢が実現されたと言えるのかどうか。これからゆつくり考えてみたいと思っています。

入所者の皆さまには、ふつつかで、御迷惑ばかりおかけしておりましたが、お許し下さいまして、永く保養園で働かせて頂きましたこと、ありがとうございます。

また、職員の皆さまには、日本ハンセン病学会、四回におよぶコ・メディカル学術集会、ハンセン病市民学会、病院機能評価、数多くの記念式典やシンポジウムなど、大変お手数をおかけしました。皆さまのご協力で深く感謝申し上げます。

保養園のすべての皆様の今後のご健康と益々のご活躍を心から祈念申し上げます。

平成二十五年一月二十七日記



福西征子園長先生を送る会より

平成24年12月18日

於…中央センター多目的ホール



福西征子園長送別の辞

松丘保養園副園長 川 西 健 登

このたび福西征子園長先生がご退官の時を迎えられるにあたって一言感謝の言葉を述べさせていただきます。

福西先生は京都大学医学部・小児科学教室でのご研究の時代に、当時ハンセン病医療のひとつの中心であった京都大学皮膚科特別研究室の主任教授西占貢先生の門下に入られ、爾来今日まで四十余年にわたってハンセン病医学・医療の道一筋に歩んでこられました。その間、松丘保養園では平成四年十一月に多磨全生園から副園長として赴任され、今日まで

実に二十年余、平成六年四月に園長に就任されてから十八年九ヶ月の長きにわたって園のために尽くしてこられました。つまり先生は医師としての公生涯の中で最も充実した年代の二十年間を松丘保養園のために捧げられたことになります。

この二十年の間には、平成八年に「らい予防法の廃止に関する法律」が公布され、平成十三年に「ハンセン病国家賠償請求訴訟」熊本地裁判決があり、さらに平成二十一年の「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の公布と、ハンセン病に関する政策が目まぐるしく変化した時代でありました。この困難な激動の時代に、松丘保養園で医療・福祉・看護などの質が維持され、入所者のみなさんの療養生活が守られたのは、先生の適切な管理・運営の賜です。

先生のご活躍の場は松丘保養園内にとどまりません。厚生労働省におけるハンセン病療養所所長会議等ではその重鎮として常に指導的な役割を果たされました。学会活動では日本ハンセン病学会、コメ

ディカル学術集会の学会長を歴任されましたし、ここにご出席の品川信良先生が主催しておられる「セミナー医療と社会」でも常連のメンバーであられました。また在任期間中の特筆すべき国際的活動として、世界保健機構を介してアジア、アフリカの諸国を現地訪問してなされたハンセン病およびブルーリ潰瘍のフィールドワーク、そしてアメリカ合衆国、米軍病理学研究所 (Armed Forces Institute of Pathology) と共同してなされ高い評価を受けたブルーリ潰瘍の病理組織学的研究があります。

しかしそのようなお働きの陰には余人には計り知れないご苦労があつたはずで、福西先生はご自分の苦労を人に漏らすような方ではありませんが、先生の歌日記を拝読させていただきますと、その一端を窺うことができます。

たとえばこれはある年の十二月の一日、「雪降り続け、気温下がる。午前中、外来診察と病棟回診。午後は再び病棟回診。咯血した患者の血管確保と治療方針を出すのに手間取った。空いた時間に、年末に向けてのカルテの整理と処方箋書きをして、一日

中忙しい思いをした。深夜一時半、病棟の九十六歳男性が息を引き取られた。後処置を終えて、就寝は二時。」深夜まで働きつめの一日です。

別のある日、「午前中、手紙を二通、会議二つ。午後は病棟回診と処方箋書き。昼過ぎから、左股関節が痛んで困った。夜になつても痛みが収まらず、帰宅後は、ソファアに横になつてそつと過ごした。

垂れ込める雪に憂鬱くたびれて、こちらで一息休んでどっこいしょ」耐えがたい痛みとお疲れをおおらかなユーモアで包んで歌つておられます。

「夜七時五十分の新幹線で帰青、深夜に帰宅した。風呂を沸かし、洗濯物を片付けて、明けて二時過ぎに漸く横になつたが、朝まで熟睡出来ずとうとうとした。」ご主人・ご家族を残された京都のお宅と青森を往復しながらの単身赴任生活での、先生の献身的なお働きはまさに命を削つてのことであつたと思えます。

「将来を語れと言うもそれは難し、病人診るに魂揺らぐ日々」

「国立療養所松丘保養園の将来構想案」のひとつである「保養園病棟に於いて定床五床の保険診療を付加する案」は去る十一月一日付けで受理されましたが、それはこのような診療に没頭する日々の中での煩悶の末に、纏められたのではないのでしょうか。

またこれはある年の年忘れお楽しみ会で、ある女性入所者が歌に合わせて踊った舞の美しさに打たれて詠まれた歌。

「手の指の柔らにしなひゆるやかに、意志持つ腕空を抱きしむ」

そこに先生は「この肉体もまた滅びるのだという思いにかられ、不意に涙が零れた」と書かれていきます。この宇宙の中の小さな弱い命への限りない慈しみが感じられて心打たれます。

それにしましても、二十年という歳月は尋常なものではありません。先生のこの歳月は、入所者のみなさんの半世紀を優に超える辛苦と忍耐の日々に、先生ご自身がひとりの人間としてまた友として答えたいという思いがあられたのではないかと、私は推

察しております。

福西先生は医師として、施設管理者として、入所者のみなさんのかけがえのない友として、松丘保養園にとって巨大な存在であられました。その先生の後に園長職を継がせていただくとうとしております私は、比べ物にならない程の非力非才で、本来ならまったくその器ではありません。ありのままを申しまして、光榮の念を上回る不安があります。

福西先生が体現してこられた松丘保養園の伝統の本質は、一人ひとりの入所者のみなさんの命の尊厳に対する敬愛にあります。それは同時に、職員間相互の尊重・リスペクトを含んでいます。園長職を引き継ぐにあたって、私はなによりもまずこの入所者と職員のみなさんへの敬愛の念を自らの心とすることに努めたいと思います。「土の器に宝を持てり」という言葉があります。この場合、土の器は私です。宝は入所者と職員のみなさんです。さらに、既に逝去された入所者のみなさん方もまた掛け替えのない宝とさせていただきたいと思えます。

松丘保養園の運営には些かの間断もあつてはなりません。何があつても入所者のみなさんの安全と安心が脅かされることがあつてはなりません。この精神に立つて、これまで福西先生のご指導の下、入所者自治会や職員のみなさんの協力で築かれてきた質の高い福祉・医療・看護を引き継ぎ、守り、堅持していきたいと思ひます。さらには時代の要請に即した緩やかな変革、これを園の構成員全員が一致参加して推進していくことも必要でしょう。これこそが長年の先生のご労苦に報いる道であると私は固く信じております。

福西征子園長先生、重ねてありがとうございます。

十分に意を尽くしませんが、心からの感謝を以て送別の言葉に代えさせていただきます。



「送る会」会場の様子

送ることば

入園者自治会 会長 石川勝夫

本日、国立療養所松丘保養園福西征子園長を送る会にあたり、一言御挨拶を申しあげます。

福西園長は、平成四年十一月一日、多磨全生園より松丘保養園へ副園長として赴任され、平成六年四月一日より園長としての重責を全うしてこられました。

ここ、松丘の地において、私達入所者のために、医療に関わることを始めとし、松丘保養園の施設運営に至るまで、まさに全ての面においてご尽力頂きましたことに、心から感謝申しあげます。

また、本日は、福西園長のお人柄を示すように、送る会にはこのように多くの入所者の方々にご出席を賜りました。

松丘での在任中は毎日多忙を極め、業務に邁進して来られました。福西園長の施設運営に対する情熱があったからこそ、松丘保養園は発展し、今


の松丘が存在するのだと私は確信しております。

私達はこれからも福西園長の精神を引き継ぎ、施設運営に万事ぬかりのないように、意見を発し、協力していかなければならないと考えております。

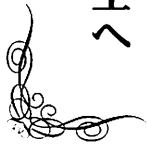
福西園長、園長としての重責ある立場にありながら、私達の側に立って、私達の想いに答えて下さいまして、本当にありがとうございます。退官後は少しゆったりとお過ごし下さればと思います。

福西園長、本当に長い間ごくろうさままでございました。そしてありがとうございます。

平成二十四年十二月十八日



入園者より福西征子先生へ



会津人の足跡

—福西園長の退官を迎えて—

滝田 十和男

NHKの今年の大河ドラマは、一月六日、日曜夜の、第一回の放映から始まった『八重の桜』だ。そのヒロインは、福島県会津出身の実在の女性、新島八重の波乱に満ちた生涯に、スポットを当てて描いたということで、早くも多くの人々の人気をあつめているが、会津には古くからの会津藩独特な、伝統に培われたものがあり、そこから傑出した人々を数多く輩出している。

明治維新の混乱の中でも、会津藩は最後の最後まで、徳川幕府への忠勤を守り、官軍に抵抗したがために、『勝てば官軍、負ければ賊軍』の言葉が生ま

れた程、敗戦によつて領内の人々は、塗炭の苦しみを味わうことになった。

その話はさて置いて、会津には幕末から明治にかけて、日本で初めての『孤児院』を造り、飢饉や戦乱で親を失った子供たちをあつめて、養育に尽くした、孤児の母『瓜生いわ刃自』の功績は、その地に正座した姿の銅像が建てられ、今も世の人々から高く称えられている。

銅像と言えば、会津若松からほど遠からぬ同県須賀川市生れの『服部けさ女史』を忘れて欲しくない。なぜなら服部けさ女史は、日本で女性で初めて医師の免許を取得した、言わば女医のはしりであり、大先達なのである。

しかも彼女は市井での診療よりも、当時社会から見捨てられていた、ハンセン病患者救済のために、温泉で有名な草津町に施設を造った。古くから温泉が病気に良い薬効がある。と信じられ、温泉に湯治に集まる患者が、救いを求めて来るので、見捨てては置けず、孤軍奮闘で経済的にも、たいへん苦勞しながらの活動だったという。

昭和五年に国立の『栗生楽泉園』が開設される以

前の頃の話で、女史の年譜も私の手元に無いので、詳しくは紹介できず、残念であるが、後年、服部けさ女史の母校の須賀川女学校、いまの『須賀川東高校』の校庭に女史の胸像が、地元の有志の手で建てられた。その除幕式に今は亡き高松宮さまも、親しくご臨席なされたことも記憶に残っている。

いつか、けさ女史の甥に当たる歌人で、國學院大学の教授を勤める服部良一氏から直接、『うちの叔母服部けさが草津で云々……』と親しみを込めて、お便りを頂いたことがあったのを、今は懐かしく思い出される。

また静岡の復生病院に、少女時代にハンセン病と誤診されて、入院したまま、実家には戻らず、そこで看護婦として、患者のために働いて、生涯を終えた井深八重女史も会津武士の出であるという。むかし復生病院を訪ねた折り、井深八重女史（関婦長さんと言っていた）にお目にかかったことを思い出すが、まことに柔和な方で、会津の人らしく凜とした顔立ちが忘れられない。

こうして、会津出身の優れた、恵まれない人々への奉仕の生涯に殉じた、女性たちを紹介してきたの

は、会津という独特な精神風土から生まれた、これらの人の中に、われらの福西征子先生の存在も、加えて然るべきではないかと思われて、前段が少しばかり長くなってしまった。

われらの福西征子園長は、平成二十四年十二月三十一日を以て、松丘保養園の園長職を定年退職された。

福西征子園長が松丘保養園に、東京の多磨全生園から、副園長として赴任されたのは、平成五年というから、今年で早くも二十年になる。全国十三カ所あるハンセン病療養所のなかで、女性が園長を勤めたというのは、私の知る限り、松丘の福西園長が最初であつて、その後、他の療養所でも聞かない。

松丘は全国の国立療養所の中でも、最北端に位置して、特に一年の半分近くは豪雪だ。たならぬ、寒冷の地に二十年の間、しかも女性の身でご家族とも離れて、独り単身赴任をやり遂げられたことは、到底、余人の成し得る生易しい事ではない。そこに会津魂に培われた、強靱な精神の片鱗を見ることが出来る。

福西先生は、松丘に就任当初から、重病棟を回診

されるときも、治療棟での診察時でも、白衣の予防着は一切着用されず、私服のまま診察に当たられた。(最近になってから漸く、白衣姿で、お出ましになることはあつたけれど)

これには皆が驚かされた。松丘では創立以来昭和三十年代までは、職員の作業衣といったら、病棟でも治療棟でも、あの宇宙服を思わせるような、いかめしい装備が常であつたから、平成の時代に入つても、感覚的にその当時のきびしい面影が残つていて、私服での診察など到底、考えられないものだっただけに、松丘にも新しい時代の到来を、思わせるものがあつた。

それは、福西先生ご自身のお考えがあつての事にして、園内を一挙に明るくして呉れたのは事実だ。平成六年の夏、私は風呂場の上り湯の所で倒れて、意識を失つたまま病棟に担ぎ込まれた事があつた。

倒れたとき折よく、風呂場には私のほかに、もう一人の藤田さんという人が居合わせて、私の急変を知らせてくれたから、早々と搬送して貰うことが出来たのであつたが、翌朝、病棟の個室で目を覚ましたときに、看護師から、『夜中に何遍も福西先生が来

られて処置に当たつてくださったのよ』と聞かされたときは、まだ気分もおぼろ気だったが、先生から後で『あなた、もうちよつとで危なかつたのよ』と真実こめて言われ、私はそのとき如何に危険な状態に置かれていたかを、身を以て知らされたのであつた。

夜を通して生死の境をさ迷つた私は、その後一月半にも亘つて、一日に六本の点滴治療が施され、順調に体力を回復し、無事に退室することが出来たのであつた。

その当時、私は糖尿病を患い、治りたい一心で、極端な食事療法を始めていた。日に三度の食事にも、極度に肉類や油ものは申すに及ばず、カロリーの高いと思われる物は、一切控えていたために、何時の間にか栄養失調に陥つていたのである。

だから回復にも時間がかかり、人一倍ご心配を掛けてしまった。

そのとき折悪くも妻の知子が末期の大腸がんのため、おなじ病棟の離れた部屋に入室していて、もう食べ物も受け付けなくなり、県立病院での手術の話がすすんでいて、私が病棟から戻つて来た翌日から、

県病に行った妻の許に、知人の車で送り迎えを頼んで、通う事になった。妻の手術後は園から職員が交替で付き添いに当たってくれたから、手足の不自由な私が、出掛けるまでも無かったかも知れないが、やはり少しでも私が患者の側に居てやりたい、という気持ちで、松丘から県病までは、距離にして十キロの道程を毎日出掛けて、手術が無事に済んで、退院までの三週間を、通い続ける事が出来た。

これも私が風呂場で倒れたとき、福西先生が速やかな処置を施して下さったからであり、また妻が手術後ちよほど半年後に、松丘の病棟で亡くなるのであるが、妻は最後の意識が薄れる直前まで、福西先生の手厚い診療ぶりに、感謝の言葉を口にしていたし、私は今もそのときの情景が、目に焼きついて離れることはない。

私は直接、体験したことだけを端的に書いてきたが、何の病気であれ、病棟で生涯を閉じた人も、回復して自室に戻れた人も、ことごとく福西先生の手厚い診療によって、助けられた人々であると言っても、過言ではない。

松丘では恒常的な医師の不足から、園長自らが夜

の宿直もしなければならぬ体制が続いているが、不幸にして亡くなられた多くの病友達は、超高齢や、がんなど、避け難い場合が多いが、統計を調べるまでもなく、福西先生の在任中に、松丘の場合、一年に平均十名の死者があつたとすれば、二十年間に合わせて、二百名の方々が、直接、福西先生の聴診器に看取られて、永遠の眠りに就く事が出来たのである。これは大変な尊いことである。

長い療養所生活では、ほとんどの人が、故郷の家族とも断絶になり、孤独な老後を完うした果てに、最後は私の妻の場合のように、病友たちは心からの感謝に満たされて、己が人生を恨むことなく、旅立って行つたに違いない。

一般の世間からは、あまり目の届かない療養所の片隅で、黙々として臨床医師の立場を、貫かれたばかりでなく、施設長としても、園内の隅々に目を届かせ、女性らしい細々とした心遣いがみられた。

平成時代のハンセン病界は、大きな変革を遂げた時代と言えるが、まず、熊本地裁における判決を、百パーセントの完勝に導き、それに波及して、社会のハンセン病に対する認識も高まった。

その渦中であつて、施設長という立場は、私達の

思ひの及ばない、気苦労の連続ではなかつたか、と思ふし、何より松丘の施設整備の改善は、雪国特有の設計が求められ、たまたま松丘保養園の創立百周年祭を、医療の場と居住区を一方所に纏めた、新しい二階建て造りの「中央センター」を完成させ、その建物の「多目的ホール」を会場として、寛仁親王殿下や知事、市長など、地元の首長らの参列を得て、大々的に祝うことが出来た。この建物は最も完成度の高い、近代的な工夫が随所にみられ、松丘百年の歴史を飾るに、最も相応しい便利な施設となつた。在任中にこれを成し遂げた、園長である福西征子先生が、任期を完うするに当たつての、まさしく松丘に住む、私達人園者に対する、『療養の安心』を保証する、プレゼントとなつたのではないかと私は思つてゐる。

園長職となれば、多方面に亘つて、印象ぶかい足跡を残された。

後日、全入園者に京都鶴屋吉信の、箱詰めの子が一箱ずつ配られ、驚きと女性の園長らしい、細やかな気配りに、改めて感謝の思ひを、深くして頂

戴したのである。

会津藩は、のちに斗南藩と名を変え、移封されて来たのが、青森県地図のほぼ半分を占める、南部地方の広い地域であつた。そこには今も尚、会津人が築いた生活文化が、根強く息づいてゐるのを考えれば、福西園長が松丘に残した足跡も、決して無縁なものでは無いように思えてならない。

.....

終りに〓編集部の励ましを頂いて、部屋の片隅に放置していたワープロの蓋を、半年ぶりに開いてみたものの、体の衰えはどうしようもなく、仲々キーを打ち込む気力が出てこない。数日を費やして、やっと前掲の粗文とは相成つた。福西先生には、いろいろとお世話になつたし、ご迷惑を掛けたことも多いが、何時までもお元気で、松丘を思い出して頂きたい。

福西征子先生 ありがとうございます

神子澤 悦子

平成四年十一月、青森はもう冬間近だった日、福西征子先生は、松丘保養園に御出でになりました。

福西先生は朝、自治会事務所に御出になって、事務長さん、福祉室長さん、その他の人々とお茶を飲みながら四方山話をなさいました。

ある時、福西先生は糠練の話なさいました。遠く離れている御家族のことを思つて、何かと送つておられたようで、糠練を送つたら、おうちの人は一人に匹ずつ焼いたようなのです。「今度からはこの魚だけは送らないように」と言われたと笑つて話をされました。お茶を飲んでいた皆が大笑いしました。京都では『練そば』が有名で美味しい練ですが、寒い地方では保存食としての糠練でした。

福西園長先生は、常に入園者を第一に思つて下さつて、緊急の時には私服で飛んで来られることが多々ありました。高齢化して長い療養生活の私達に、ハリ、灸、県病への入院、診察等、更に園長としての対外的

な行事等、御苦勞が山程あつたことと思つています。今の中央センター一階、二階の大工事、「我ら四方より患難なやみを受くれども窮きやうせず、せん方かたつくれども希望のぞみを失うなはず」この希望をひたすら保養園百年に向けて進まれたことと思つています。百年を迎える療養所は少ないのです。

お祝いの日、宗教団体、地区の役員、中学校、小学校の生徒さんと私達を同じ所にテーブルを並べ共に飲食をし、交わりをさせていただきました。

福西征子園長先生をお送りする日、懐かしいスライドを見ながら、若く御元氣だつた先生を思い、二十年二ヶ月は頭髮に白いものが見えるようになりました。

愛いっぱいで只管ひたすら入園者のために、愛する御家族も御自分さえも犠牲にして、日夜勞して下さつた福西征子園長先生、本当に有難うございました。

そして、川西健登先生のお別れ会でのお言葉「我らはこの宝を土の器にもてり」、福西征子前園長先生は建物を造り、川西先生は私達一人一人を宝として、これから共に仕え、歩んで下さると思ひ、心に暖かいものが、いっぱい広がるのを感じました。



元職員よりメッセージ



福西征子元園長先生の退官に寄せて

藤 嶋 由 子

二十年以上に渡り、松丘保養園を守り発展させて来られました福西征子園長先生が、このたび川西健登先生に園長職を引き継がれ退官なされました。

保養園での激務に耐え抜かれ、園の将来構想に道筋をつけるとう云う信念を貫徹されての退官でした。心から御礼と御慰労を申し上げます。

この度、甲田の裾への寄稿との事でしたので、稚拙で恐縮ですが、私の心に残る福西園長先生の想い出を述べさせて頂きます。

私が初めて福西園長先生にお会いしたのは、平成八年の副総看護師長の時でした。治療棟内科が兼務でしたので、福西園長先生の診察の介助を通して間近に接しておりました。

園長先生の診療は私がこれまで出会った医師とは違うものでした。当時の入所者数は三百名以上で、内科受診者も多く、特に園長先生の診察日は混み合っておりました。そんな中、受診された方に病状訴えだけでなく、生活上の事、食事、心配事などのお話を丁寧に聴かれ、一人一人の気持ちをしつかり汲み取る努力をされておられました。顔を間近に引き寄せ、優しく包み込む様に問い掛ける姿に、私は大きな感動を覚えたことを未だに忘れられません。

又、ある時一人の患者さんが診察中にこんなことを話し出されました。

「なあ園長先生、俺達は先生みたいないい先生に来てもらって、本当に有り難く思っている。いつまでも長く居てもらいたいと思っているけども、先生を青森と京都とで夫婦別れをさせていると思うと、とても申し訳なくてよ」

それを聞いた園長先生は、

「○○さん、そのようなことは二度と言わないでちょうだいね」と毅然と諭されました。当時の私は入所者の方と同じ思いでしたので、園長先生の気持ちを推し測るには、まだまだ未熟でした。福西園長

先生に出会い、その後もう一度ハンセン病看護に取り組みたいとの想いから、平成十七年総看護師長として、再び松丘保養園での勤務が叶い三年間共に働く事が出来ました。

福西園長先生の向ける温かい視線は入所者に限らず、職員にも同様でした。どんなに疲れていても、患者さんの事を最優先に、看護師からの報告は決してぞんざいにしない、しっかりと聴いておられる姿に頭が何度も下がる思いがしました。

人を深く理解する、人を大切にすると云う看護には必然的な事を、真の意味で福西園長先生から教えられた思いです。

そして福西園長先生が一番心を砕かれたのは、将来益々入所者が高齢化し減少していった時、入所者の皆さんが望む「終の住処」をどのように整えていったら良いのか、どうあれば職員が入所者を支え切れるのかと云った点でした。迫り来る近い将来を見据えて、平成十七年から「松丘保養園将来構想」の具体的作業に入り、平成十八年には新庁舎（中央センター）建築着工、二十一年三月完成、四月には引越すと、絵に描いた将来構想が現実のものとな

りました。時を同じくして「ハンセン病問題解決の促進に関する法律」が公布されました。これからの松丘保養園の将来構想を入所者の皆様と練り上げられ、その道筋をつけられての退官ですので、福西園長先生には思い残すところのない、存分な奉職であつたと思います。

福西園長先生の大変な御苦勞を陰で支え続けられました御家族の皆様にも、心から敬意を表したいと思います。

本当にありがとうございます。

H 8・4・1 H 9・3・31 副総看護師長
H 17・4・1 H 20・3・31 総看護師長

福西征子先生 お疲れ様でした

高柳 武 正

福西園長先生、つつがなくご退官の日を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

松丘保養園での勤務は約二十年と伺っておりますが、雪の多い青森の地で長い間、単身での生活はご苦労も多かったとお察しいたします。本当にお疲れ様でした。

私と福西園長先生との出会いは、私が人事異動で松丘保養園勤務を命ぜられたときからになります。

広大な敷地に桜葉の薫る素晴らしい場所でしたので、爽やかな自然を感じる環境での勤務を楽しみにしておりました。

しかし、ハンセン病療養所という施設での勤務は自分にとって初めての経験であり、さまざまな不安を抱え、勤めきれぬのか悩んだこともありました。

実際に勤務し始め、さまざまな問題が高い壁となつて立ち足はだかり、乗り越えられないと思つたこ

ともありましたが、そのような時、私が頼りにし、相談したのが福西園長先生でした。

らい予防法の廃止に関する法律が平成八年四月一日に施行され、今までの法律が無くなるという大きな時代の変化が起こったとき、私も不勉強で今後どのように進めてよいか解らず悩んでいたところ、園長先生はこれまで培った経験と、卓越した指導力を発揮され入所者自治会の皆様との協議を重ね協力を取り付けられたことは、今では貴重な経験として忘れられない思い出となりました。

また、居住者棟と本館福祉棟を結ぶ中央渡り廊下の整備においても、福西園長は入所者の皆様の高齢化が進んでいることから、棟から棟への往來の不便さを予見し、将来は必ず必要となるので整備しましょうと提案され、自治会の皆様と整備計画について協議を重ね、中央渡り廊下の整備が実現しました。この整備の実現で入所者の皆様は、冬に雪道を歩くことも無く安全に福祉棟に行くことが可能になりました。このことはやりがいのある仕事として今でも覚えていきます。

予算が伴う行事や整備などが必要であれば、厚生

省に足を運び折衝もされました。

いずれも福西園長先生が、各行事・整備についても自治会の皆様と共に協議し、入所者の皆様が最大限樂しめるように入所者の皆さんのことを最優先に考え、さらに、職員も含む全員に対して、気遣いも忘れなかつたために、尊敬され、大きな信頼関係を構築していたからだと今になって痛感しております。

最後に。人情味のある慈愛の精神にあふれた福西園長先生が退官されるのは甚だ寂しい思いですが、くれぐれもご自愛なさって過ごして頂きたいと思いません。

本当にありがとうございます。

(元事務長・H8・4・1～H12・4・1 在籍)

福西先生との思い出

松丘保養園事務長 谷下田 喜代志

私が、初めて福西先生とお会いしたのは、国立療養所山形病院から赴任した約十九年前の平成六年七月一日でした。

当時の福西先生との思い出では、県内国立病院・療養所対抗野球大会の時と松丘保養園附属看護学校のバレーボール大会に監督して優勝した時です。野球大会の時には、福西先生は野球をできるとは全く思っていなかったようで、たまたま、ヒットを打ち、少しばかり活躍した時に褒められました。仕事では褒められる事がありませんでしたので、今でもその時の印象が強く残っています。バレーボール大会の時は、無理矢理、福西先生からの命令で監督させられ、なんとか優勝した時に、大変喜んでいただきました。大会当日終了後の祝勝会では、生徒からビールが飲みたいたいと言われ、普通であれば許されないので、優勝気分ですわらず、OK出して、大いに盛り上がったこと、今でも思い出します。

平成二十四年四月に事務長として、松丘保養園に勤務することになりました。最初に福西先生から事務長としての心構えを教えられました。今までの私の言動行動のまずい点を指摘され、私自身大いに反省し、注意して行動するようになりました。仕事においては、とにかく福西先生は卓越した知識と強いリーダーシップを持っていました。ですから、方針を決めると行動が早く、私自身がそれを理解し、ついていくのが一杯でした。やはり、松丘保養園が他のハンセン病療養所より施設整備が進んでいる状況、医師の確保がされてきた状況、質の高い看護・介護が維持されているのは福西先生の尽力によるものだと分かりました。今は福西先生が退官した後の松丘保養園を幹部職員として川西園長先生を補佐し、これまで福西先生が築いたものを後退させることなく、さらに発展させていかなければならないと強く思っています。

福西先生、本当に長い間ご苦労さまでした。今は十分にお休みしていただきたいと思います。

私自身、これからも福西先生から教えられたことを守って、頑張っていきたいと思えます。ありがとうございます。



園長就任挨拶

園長 川西 健 登

昨年十二月三十一日付けをもって退官されました福西征子前園長の後を受けて、一月一日付けで、園長に就任させていただきました。

私が福西前園長から引き継ぎました松丘保養園の基本的理念の一つは「何があっても、入所者の安全と安心な療養生活を保証する」、もうひとつは「入所者のみなさんと私たち職員は互いにかけてがえのない人格を有する友人である」ということです。私は、福西前園長をはじめ職員のみなさんが心をこめて診てこられた入所者のみなさまお一人おひとりの命の尊厳に対する敬愛の念を根底に持つて、松丘保養園の管理運営にあたつてまいります。

長い年月にわたつて筆舌に尽くしがたいご苦勞をされてきたご高齢の入所者のみなさまには充実した日々の生活を平穩のうちに送つていただきたいと思います。そのためにはこれまで諸先輩の努力で築かれてきた松丘保養園の医療・看護・介護・福祉の質を維持し、さらに向上させていかなければなりません。大野副園長、谷下田事務長、樋口総看護師長、

をはじめそれぞれの職員のみなさんがその能力を充分に發揮して、入所者のみなさまのために力を合わせる事ができるように努めてまいります。

言うまでもなく、松丘保養園の主役は園長でも職員でもなく、入所者のみなさま方おひとりおひとりです。今最も必要なことは、私たち職員が入所者のみなさまによかれと考えることを遂行する前に、入所者のみなさまのほんとうの希望は何なのか、入所者のみなさまは今何を願っておられるのかを、より謙虚になつて拝聴することではないかと思ひます。入所者のみなさまのほんとうの想いを私たち職員が耳を澄ませて聴きとること、声にならない声を肌で感じる事がすべての基になればなりません。更には既に逝去された入所者のみなさまの願いが何であつたかも、あらためて学び直させていただきたいと思ひます。それこそが松丘保養園をより良くしてゆく力になります。

本年四月に創立一〇四年を迎える歴史ある松丘保養園に園長として勤めさせていただくことは私にとって身に余る光榮です。この機会を与えて下さいました入所者自治会をはじめ入所者のみなさまに心から感謝申し上げます。もとより非力ですが、みなさま方のために全力を尽くして参る所存です。どうかよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

最後になりましたがこの一年のみなさまのご健康とご多幸を祈ります。



副園長就任のご挨拶

副園長 大野 忠 良

毎日、雪が降りしきっています。毎年見る風景ですが、去年よりは幾分少ない感じがします。青森に来て、四度目の雪景色です。

ボーツと眺めながら、去年の今頃何をしていたんだろうと考えてみました。しかしなかなか思い出せません。きつと毎日同じような事を繰返し続けていたため(カルテを読み、レントゲンフィルムを見、検査データを見、診察し、必要な本や雑誌を読む等)、あまり特色のある日々になっていなかったためだろうと考えています。

しかし、この平凡な繰り返しによって、段々と病気の深みに入っていくような気がしています。

一月から副園長に就任することになりました。これまで以上に、より重い責任を持って、幅広い保養園の活動に加わっていきたいと思います。皆様方の病気との闘いにも、より果敢に病気と向かい合い、共に闘っていくつもりです。孤独な闘いとならないよう、スタッフ一同緊密に連携し、少しでも回復に向かうよう役立ちたいと思っています。皆様方の保養園での生活が、少しでも楽しく有意義なものとなるよう願っています。

第九回ハンセン病に関する

青少年研修会 感想文

実施・平成二十四年七月二十六日～二十八日

九回目となるボランティアグループ「はまなすの里」と北海道の共催による「ハンセン病に関する青少年研修会」。

緊張が続いた講義の後には、「納涼祭り」に参加するなど、園内の行事も北海道道民会の皆さんと一緒に積極的に楽しみました。

伝えていくこと

北海道登別明日中等教育学校 中等二年（高二）

菊地ねね

私は、松丘保養園を見学するまでは、ハンセン病療養所は暗く悲しい場所であると思っていました。

事前学習の為にと思って読んでいた北條民雄氏の『いのちの初夜』のイメージが強く残っていたので

す。淀んだ空気の中で、生きる希望を失った主人公と重病人の世話をする男が会話する光景は、私に衝撃を与えました。その情景が頭から離れずに向かったためか、いつになく重苦しい気持ちで列車に乗ったのを覚えていきます。

しかし、いざ保養園に入ると、私の印象とは全く違うことに驚きました。建物は新しく改築されていて、歩道はきれいに舗装されていました。町中にあるにもかかわらず自然が豊かで、「これが本当に保養園なのか？」と目を疑いました。後からこの自然が、「脱走者を阻むためのもの」と聞いてしまっただけからは、少しばかり忌々しいものに見えるようになってしまっただけです。

一番記憶に残っているのは道民会の田中春男さんとの出会いでした。田中さんは道民会の方ではありますが、生まれは高知県なのだそうです。若い頃からハンセン病であると診断されていた田中さんは、精一杯毎日を楽しもうと家出をしては外に出歩いて遊んでいたようなのです。療養所に入ってから作った作物を外に売りに出ているようなのです。田中さん曰く、「その気になれば外の人と交流するこ

とも出来た」そうですが、差別された療養所に入れられたにもかかわらず外の人と交流をしようとした田中さんのガッツにとても感動したのです。

ハンセン病問題は病気に関する知識不足と政府の強制隔離政策による根強い偏見によるものでした。今の日本であっても、知識不足や強い偏見は無くなつていません。例えば、原発のまわりに住んでいた人々への対応であったり、いじめであったり。

私は知識を得ようとする気持ちが必要であると思います。「無関心」が一番の差別であると、自治会長さんもおっしゃっていました。私は、松丘保養園に行ったことでハンセン病について、保養園で暮らしている人々について多くの知識を得ることが出来ました。今度は、私がそれを伝えてゆくべきだと思います。もう二度と、このような差別が起こらないためにも。

ハンセン病に関する研修会を終えて

北海道大麻高等学校三年 齊藤泰介

今回の研修会に参加するにあたり、事前にハンセン病について学習してきましたが、研修中は本を読むだけでは絶対に関ることのなかった様々な過去を学ばせていただきました。

研修中に様々な方のお話を聞きましたが、特に回復者である道民会の方々の言葉は、この病気を取り囲む過去と現在の日本の社会についての強い想いがこめられているように感じました。実際に受けてきた差別や、療養所に入ってきてから感じた、まるで「刑務所の囚人」の様な扱いを受けてきた話には本当に心が痛みました。

しかし、持っていたイメージと違い、回復者の皆さんはとても明るくて優しい方ばかりでした。ある一人の回復者の方が言っていました。

「僕は病気にもかかって、いろんな差別を受けてきたけど、今こうやって過ごしていると、何だかんだあったけど、幸せな人生だった。」その言葉は聞いている僕たちも幸せにしてくれるようでした。その

時のあの方の笑顔は一生忘れません。

園内のあちこちで流れていた「ふるさと」の歌は、まさに全国の元ハンセン病の方々のためにある歌だと思えます。遠い故郷を想いながらも帰ることのできない切ない想い。僕たちは今回その想いを直接感じることができました。今、北海道では、ハンセン病という病気も、その病気にまつわる過去もほとんど知られていないのが現状です。しかし、道民会の方々の様に北海道出身の方がいるのも事実です。だからこそ、今回の研修に参加した僕たちの義務として、少しでも多くの人にハンセン病について正しく理解してもらい、本当の意味でのハンセン病問題解決に努めていきたいと思えます。

松丘保養園を訪れて学び考えたこと

北海道高等学校 二年 千村 聡 美

私は、初めて松丘保養園を訪れて学ぶこと考えることがとても多くありました。私はこの研修の参加が決定するまでハンセン病がどんな病気かを知らず、その後ハンセン病に関する本を何冊か読んでみて、

歴史を知りました。しかし、本には患者さんに対する理不尽なことばかり書かれていて具体的に想像ができませんでした。

実際に、松丘保養園を訪れて元患者さんたちから聞く体験談はやはり理不尽で、でも本当なんだと理解しました。

また、桂田さんには園内を解説しながら案内していただきました。本を読むだけではわからないことも知り体感できて、とてもよかったです。園長先生や総看護師長さんの話も伺うことができ、松丘保養園はたくさんの人々のサポートで成り立っているということも実感しました。

そして、あたり前ですが、ハンセン病問題がまだ完全に解決していないことに気づかされました。現在入所者の平均年齢は八十二・九歳と園内での高齢化が進んでいます。今後、納骨堂をどうするのか、国は最後の一人の為にまで療養所を存続させてくれるのか、などといった、たくさんの問題を直接訴えることができる人も少なくなっています。

さらに、社会の中には、まだまだきちんとした知識を得ていない人たちからの差別や偏見といった問

題も残っています。

私は、改めてこのような問題に気づかされ、自分に何が出来たかを考えました。未だ高校生の私に出来ることは極僅かではないかもしれませんが、今回、実際に保養園に行き元患者さんたちに会ってきた者にしか出来ないことも、きつとあると思います。私たちに優しく接して下さったみなさんと偏見や差別なく、一緒に生きていける社会への実現のために、一人でも多くの人に真実とみなさんの優しさを伝えていきたいと思っています。

私たちに出来ること

北海高等学校二年 富 樫 好 音

松丘保養園で過ごした三日間は、私の人生において、とても意味のある大切な三日間となりました。

私がこの研修に参加することになったきっかけは、同じ部活の先輩が一昨年と昨年はこの研修に参加していたことや、昨年の十二月に行われたハンセン病問題に関する道民フォーラムに参加したことです。いずれもハンセン病問題について無知だった私

が保養園に行つて「学んでみたい」、「交流してみたい」と思うきっかけとなりました。

実際に保養園に行つてみると、自分では文献などを読んで、知識がある程度頭に入れていたつもりでしたが、やはり自分の目で見て耳で聴いたものは想像とは違い、とてもショックを受けました。

私が話を聴いて、特に衝撃を受けたお話は、「療養所」と呼ばれていた施設の実態です。ハンセン病患者に対し強制隔離だけでは無く、重症者の看護や介護、さらには亡くなった患者の方の火葬までもが入所者の手で行われていて、「療養所」というのは名ばかりで、とても残酷な施設であったという過去の事実です。このようなお話を保養園の方々は、とてもつらい経験なはずなのに、嫌な顔一つ見せずに私たちに分かりやすく丁寧に話して下さい、とても感謝しております。

また、道民会の方々のお話を聴いている時、お宅に伺わせていただいた時にはたくさんのお菓子、美味しいお漬物で、おもてなしいただきとても嬉しかったです。保養園の方々の優しさ、温かさによれとても楽しい一時を過ごす事が出来ました。

研修を終え、札幌に帰って来た私はこれから何をすれば良いのだろうか、いまの私に出来る事は何だろうかと考えた時、それはやはり私がこの研修で学んだ事を周りの人に伝えていくことだと思えます。

現代の日本では、誤った知識から生まれる差別・偏見とは違い、「無知」「無関心」という差別もあります。やはり、この差別問題は、誰かが動き出さないと、誰かがきっかけを作らないと、解決への道は遠ざかるばかりです。

私は、せっかく青少年研修という形で学ばせていただいたので、この経験を決して無駄にはせずに、今まで先輩方が私に経験を伝えて下さったように私も一人でも多くの人に伝えたいと思います。

最後に、松丘保養園の方々、『はまなすの里』の方々、道庁の方、部活の先輩、みなさんのおかげでこの三日間とても素晴らしい経験をすることが出来ました。本当にありがとうございました。

みんな！知ろうよ！！

札幌市立中の島中学校一年 各務 太 凱

夏休みに入つてすぐの七月二十六日から三日間にわたり、青森県にある国立療養所「松丘保養園」に研修に行き、園内の宿泊所に宿泊させてもらいました。

この研修はハンセン病に関する青少年研修で、今年で第九回目となるようです。主催はハンセン病を支援する「北海道はまなすの里」というボランティア団体と北海道です。行く前は、ハンセン病が今まで聞いたことのない病気だったので、事前研修会でその病気が抱えている色々な問題の大変さを知りましたが、これから知らない人たちと保養園で過ごして研修を受けてやっていけるのだろうかとかすごく不安になり、当日を迎えました。当日はJRに乗り、青森へ向かいました。

保養園は思ったより広く、札幌ドームの四倍くらいありました。そこには入所者の住居、納骨堂、慰霊碑、お寺、教会、神社、病院などがありました。納骨堂では献花もしました。

園長先生や看護師長さんなどのお話では、ハンセン病のことについて色々学びました。

七月一日現在の松丘保養園の入所者数は男性五十二人、女性六十五人の計一一七人、平均年齢八十一・九歳、亡くなった方は約二五、五〇〇人ということでした。

ハンセン病菌は人の体でゆつくりと増殖し、手や足、体に目立つ跡が残るため、「恐ろしい伝染病」と思われ、回復しても園外に出られないこと、家族もバラバラで、結婚はできるが子供は作れなかったこと、昔の保養園ではそれが許されていたことなどを学びました。実際に話を聞くと現実が重くのしかかりました。

健康な人は強制労働をさせられて、手や足をケガしたり、失ったり（昭和四十六年頃まで続いた）、患者同士で看病したりしたそうです。

また、院内の廊下を入園者がきれいにしたのに、長靴などでわざと汚くしながら見回したり、入園者に対してはひどい扱いだったとも話していました。お金も取り上げられ、保養園専用のお金と交換させられたこと、春から秋までずっと働いてもらえた

お金は五円だけだったり（昭和八年頃）、戦後は現金は返してもらったが全部は返してもらえなかったことなど、びつくりすることばかりでした。

また、病気を持つて何十年もいたら死にたくなつた（友達も家族も誰もいない）とも話していて、辛い人生を生きていたんだなと思いました。

園長先生をはじめ、入園者の方々は皆優しく明るく、昔そんなことを国からされていたとは思えなかつたです。

また、研修中にお祭りがりましたが、僕たちも参加させてもらい楽しい時間を過ごすことができました。

一九八〇年以降に生まれた日本人のうち新規患者は発生していません。二〇〇〇年～二〇〇九年の十年間において九十七名の新規患者のうち六十九名が外国籍であるとされています。ハンセン病とは、

「らい菌」による感染症で主に皮膚、末梢神経に病変を起こします。有効な治療が行われていなかつた時代（一九五五年頃まで）には、手足や顔面などの変形が重度になり、患者は偏見や差別を受けてきました。誤解や偏見は現在でも完全には解消されたと

は言えません。ハンセン病は誰でもかかる病気ですが、感染力も弱く、治る病気です。ただ、治っても後遺症が残るので、治らない病気とされてきて今も偏見や差別が続くのはとても悲しいことです。

この研修に参加して僕をはじめ社会の人々はハンセン病に対する知識や理解をもたなければいけないと強く思いました。今では、地域の人も交流を持つていますが、身寄りがないので園で暮らしている人も多いのです。

人としてその人らしく人生を生きていくために色々な事に興味を示し、理解をしていかなければなりません。そのために僕ができることは何か考える良い機会となりました。この体験を生かし、僕はみんなに伝えたいです。一人一人の間違った知識、考えがハンセン病のような悲しい、辛い差別を生んだことを。だから、色々な事も正しいことを知りましょう。人の気持ちになって考え行動しましょう。思いやりを持ちましょう。それが社会や僕たちの学校生活でも偏見や差別、イジメ、暴力などもなくなっていくことにつながると思います。

「みんな！知ろうよ!!」と僕は言いたいです。



自治会会長と道民会の皆さんと

最後になりますが、お世話になりました松丘保養園の福西園長先生、ほか入園者、職員のみなさん、ありがとうございました。

野の花の微笑^{ほほえ}み

比良 信 治

(4)

文太郎は青森に来て三日目の朝を迎えた。今日は午後の連絡船で函館に向かい、T市には夜遅く着く汽車で帰る予定である。

太陽が八甲田山連峰の上に昇っている。文太郎は通ったことのない売店の東側の住宅の中を抜けて、北側のグラランドの方に出てみた。グラランドの東側の野原に、黄色いナノハナが咲くひとむれを見つけた。ナノハナは早春の風物詩として、さまざまな詩歌にうたわれている。T市のはずれの春香山の麓にも、ナノハナ畑があつて、小さい頃に両親とその花畑に行つた思い出がよみがえつた。ナノハナをとつて家に飾つたが、ある時に母はその花束を茹でて夕食のごちそうにしたことがあつた。文太郎はきれいな

な花を食べれず、とまどつて、とうとう箸をつけないでしまったことを思い出した。ナノハナは、明るく、快活であるという花言葉を口にして、文太郎はナノハナを二、三本手にしたのである。

グラランドでは、近所の人か、或いは療養所の職員住宅が近くにあるので職員かもしれないが、野球の練習をする風景が見られた。文太郎がそのグラランドを右に見て、正門の療養所の通路に入ると、正門の左脇の花畑で、そのパンジーなどの花々にジョウロで水をかける人がいた。

「おはようございます。早くから精がでますね」

と、入所者のおじさんに声をかけた。

「お早う。佐久間さんの息子さんでしょうか？」

野球帽を被つたおじさんが笑顔で答えた。

「佐久間です。母がお世話になりました」

文太郎は通り過ぎることをやめて、

「この花畑は皆さんがつくつたのですか？」と聞く。

「うん。わしらが暇ですからね。園内を少しでもきれいにしようと思つてね。何人かで花畑を作つて勝手にやっているところさ。もう少ししたら、仲間がやつてきますわ」

「奉仕してるんですね」

「わしらの趣味でな、自分の庭をきれいにするのはあたり前や。違ふかな」

「いや、ご苦労さまです。母にかわつてお礼を申します」

文太郎は頭を下げてその場から去つたが、花畑に向かう人らしい四、五人の姿が遠くに見えた。

文太郎は母の部屋に入つて、ナノハナを花瓶に挿すと一段と部屋が明るくなつた。朝食がすんで、診察室に向かう母を送つて、再び宿泊室に戻つて、静かな食堂で朝食を食べる。

まもなくして、清水恵子が文太郎を訪ねてやつてきた。彼女は机の椅子に腰をおろすと、話をきりだした。

「斉藤きよさんがね、あなたがよんだ川柳の作品について想い出を昨夜は語つたのよ。あの作品はひとつひとつ胸に迫つてくるわね。最後によんだ『遺影無き葬送聖歌第二六六』など、写真も無い人がいるのに驚くわ。わたし、写真機を買つて、入所者の方々をすべて撮つてあげたいと思つたわ」

「それこそ、ぼくなんか、奉仕して撮つてあげればいいんだね」

文太郎は、はつと思つて口ずさんだ。

「そうよ、あなたやつたらどう？でもね、今では、写真を持たない人はいないと思うわ。それよりも親族が来てくれないことや、お見えになつてもお骨をお持ち下さらない方もいるのよ。わたしだつて来てくれる人はいないかもしれないわ」

「そんなことはないでしょうよ」

「でも、青森に移つて来たのと知らせても、姉や兄は音沙汰がないのよ。青森の向かい側にいるのに」

「それならば、出かけてみたらどうですか。ぼくが青森に来た時に、帰りにご一緒して訪ねたり、お手伝いしますよ」

「嬉しいわ。あなたと一緒になら。でもね、川柳に

あつたでしょう。『泣いて泣いて泣いて義足が立上がり』という作品よ。わたしはこの作者ほどではないと思いますが、片足は義足よ」

清水恵子は、右足のかかとをあげて、コツンと床をたたいてみせた。文太郎はにぶい音を聞いてはつとして、彼女の顔をみつめた。

「それよりも、『神の道学ぶ点字を辿る舌』、この作品はすごいわね。両眼を失い、歩く足もおぼつかないと思いますが、神への道を学ぶのは舌で点字を読むというんでしょう。頭が下がりますね」

「うーん。『うすれゆく視力へ母の写真出し』とか、『マヒの手の軽石に似た肌触り』などをよむと、当時の療養所には一人の医師で何でも処理したんでしよう。助けようとせず、人間をいじめ苦しめていくなんて、ひどい仕打ちだと、ぼくは思いますね」

「だから、『夢に来て母は涙を拭いて行き』とか、『叫んでも届かぬ故郷へ呼びかける』などの名作が生まれるのね」

二人は、北柳吟社が残した作品を話し合ったところで、文太郎があらためて彼女に聞いた。

「先程、兄や姉さんの話が出ましたが、あなたは道

南の人ですか？」

「生まれは秋田で、育つたのは北海道のF町なのよ。今は両親が亡くなって兄や姉たちは函館にいますか」

ふと、彼女は目を机の上に落として、

「両親は農家の人よ。祖父母は能登の七尾で暮らし、秋田の山里に入り、父がハンセン病をどこかで受けて悪い、兄妹の中では、わたし一人が病気をひきずつたのね。北海道の開拓では、兄はあてにならず、母とわたしが畑の仕事をやったのよ。姉は女学校に行き、兄は街に出て学校にも行かず不良少年となつて音沙汰が無くなり、父が病気が悪くなつて亡くなつた時も、兄は帰ることもなかつたの。どこかで真面目に働いてくれればいいがねと、母も心配していましたか」

「しかし、兄さんも今は元気で働いているんですね」
「そうね。兄は父の病を恨んで、ぐれていましたが、やがて働きながら高校を出て、水産関係の会社員になり、姉は高校を出て、今は二人の子持ちのママよ。母は父が亡くなってから十年位してF町で亡くなり、両親の墓はそこにあるの」

「あなたは何歳位の時に入所したんですか」と文太郎は聞きにくいことをたずねた。

「わたしね。中学を出てH市の水産会社につとめ、夜は定時制の高校に通い卒業しました。会社の事務員を続けていましたが、ある時に右の手首にやけどをして治療してもなかなか治らず、大きな病院に通院したんです。ある時に医師に首に針をさす検査を受けたのです。そうしたら痛くもかゆくもないことから、保健所にまわされて、同じ検査をうけたんですね。知覚マヒがあることから、レプラ（ハンセン病）と診断されました。やがて青森の松丘保養園に戦後間もない年の八月に入院です。わたしのアパートも保健所で消毒され、当日は保健所と警官に護衛されての入院でした」

「それでは松丘に入つて、どうして多磨全生園に移つたのですか？」

「そうなの。実は事件がありましたね。わたしより十歳位年上の男が、わたしに近づいてきて、知らない間にその人の籍に入れられていましたの。その男はわたしの留守の間に部屋に入つて、わたしの洋服なども勝手に持ち出して売り払つてしまい、わたし

を奪おうとしたの。わたしが泥棒と迫ると、『てめえの財産目当てに結婚したんだ。おれのいうことをきけ！』とどなつて、いきなり棍棒でわたしの頭と肋骨や右足をなぐりつけてきました。わたしは痛いのをこらえて、外に出てカトリック教会に逃げこみました。その後、図書室に入つて当直職員や医師の手当てを受けたんです。結局、わたしはその暴力男に知らぬまに入籍させられ、ケガは大きくなり県立病院に入院しました。そして、暴力男からの入籍も取消しさせてもらいました。

右足は二度も手術をやつて障害をもつようになり、肋膜炎をわずらつて二ヶ月余り入院しました。その後、足の治療には多磨全生園にいい外科医がいるということ、青森から移りまして治療を続けたんです。その男は、K市のやくざだったようで、のちにわたしに謝罪に見えましたが、まもなく亡くなりました。」

「考えられないようなことがあつたんですね。療養所という特殊な環境の中での、知能犯的な暴力行為がまかり通つていたんですね。それで、犯人は警察沙汰にもならず、そういう悪人こそ昔造つた監獄に

入れるべきでしょうね」と、文太郎は強調した。

「まったくあなたの言う通りよ。療養所の管理体制も弱い者いじめになっていた時代ですね。ようやく入所者自治会が生まれて強くなってこそ、民主的になってきたと思いますね」

彼女はうつむいて黒い靴下の中にある義足の一部をわたしにのぞかせた。

時計の針は十一時を回っていた。清水恵子は話し終わってすつきりしたのが微笑んでいた。

「あなたは二時発の連絡船に乗るんですね。わたし青森駅迄送って行くわ。途中にねぶたの作業小屋があるのよ。テレビで見ただけど、あなた、ちよつと見て行かない？少し早目に出てさー」

「あのでかいねぶたの作業場ですか？ぜひ見たいね」

文太郎は、母たちに早く挨拶して出かけようと思った。昼食が終わった頃に、文太郎は母の部屋に入った。母は恵子に聞いていたので察しが早い。母たちに挨拶する前に、

「ねぶたづくりを見て帰りなよ。できればお祭りにくると約束してね。おばあさん方も待っているし、

わたしたちもにぎやかにやりたいしね」

「文太郎さん、ねぶたにおいてよ、待っているわ」
「わたしも待つているわ」

二人のおばあさんも首をそろえて笑顔を見せている。「いやですね」とは文太郎はいえず、急に歌舞伎もどきでご挨拶をした。

「おそろいのおことば、文太郎かたじけなく押し奉ります。八月のねぶた祭りにはいざ見参賀し奉ります。しばしそれまでのお別れなれど、皆々様お元気でお待ち下されますように」

突然の口上に拍手がわき、母は両手をたたいて、拍子木のまねをしてしめくくる。母もおばあさん方も病棟入口まで送ってくる。出入口で、文太郎は深々とおじぎをする。皆さん元気で何よりだ、と笑顔で両手を振って渡り廊下に出る。ねぶたままでのお別れである。

福祉室にもお礼の挨拶をして、文太郎は清水恵子と国道まで出る。タクシーをひろってねぶた作業場に向かった。

新城駅の近くに、ねぶた作業場があった。恵子はテレビで見たことを言っ、見学させてほしいと、

頭を下げた。

学校の体育館のような広い作業場の中に、針金で組み立てた、得体の知れぬ大きな立体型のひとコマ、ひとコマが見える。あるひとコマには紙張りがされて、ふたつの黒い目玉が描かれて、こちらをにらんでいる。あるひとコマには竜の形をした紙が張りつけられる、というように、紙張り、色付け、電球の取り付けと、二十、三十人以上の人が各所で動いている。男も女も、若い人も年寄りもいる。

清水恵子が筆を持った男衆にたずねると、ねぶたの出し物は、「水滸伝」の一節で、「九紋竜史進」という、棒術の名人の躍動した姿を描くという。約六十日かけて、少なくとも六十人余りの人でつくりあげるといふ。

場内は風が無く、扇風機も無く、熱さが充満して、十分もしないうちに汗が体の中からふき出てくるようだ。その中で人々はシャツ一枚で、ある人は裸で格闘している。七月の中旬には完成して、予行練習をして、いよいよ本番の祭りにそなえねばならない。

文太郎は敬意を表して金一封をさしあげたいと思つたが、ふところは淋しいので思いとどまつたが、

「花っこ」は出さねばならぬと思つて、その筆を持つた大将に、

「旅の者で初めて見せていただいて大変感動しました。本来ならば『花っこ』をさしあげるべきところですが、今日は勘弁してください。祭りの大輪の花となることを期待しています」

文太郎は正直に言つて、頭を下げて外に出た。

「よかつたな。すごい人々で二ヶ月余りもかかるなんて、想像外だつたね」

と、親しげに文太郎が恵子に言う。

「テレビで見るとは違つて実感があるし、何よりもスケールが大きいということね。どこからお金をもらわないで、働く人たちもすごいね。祭りが生み出す情熱なんだろうか。だからねぶたはすごいんだわ」

清水恵子は、道ばたにあつた空箱に腰かけて首をたてに振つてうなずいている。

二人は国道に出ると、再びタクシーをひろつて青森駅に向かつた。

文太郎は駅で切符を買つて改札口にくると、清水恵子が、青森のリングと南部せんべいの袋をつめた、

大きな袋を文太郎に手渡した。

「ねぶた祭りを待っているわ。また、おみやげをわたしにも忘れないで下さいね」

と、はにかむように笑って注文した。

「こんどはおばあさんばかりでないの、ちょっと考えて持つてこなくちゃなりませんね」

「いや、おばあさん並みで結構よ」

「いやいや、中年おばさんにうまれると、あとがこわいので、あなたには特別に考えないといけないと思うんですよ。これは、ほんとうですよ」

「ありがとうございます。あなたにお会いできて嬉しいですよ。こんどねぶたに見えられたら、帰りにわたしの故郷の町に行き、江差の姥神うはがみ社のお祭りを見ませんか。これは国宝級の山車がいくつも出るの。昔からある道南の大きなお祭りよ、見たことがありますか？」

「姥神神社というの聞いたことがあるけど。お祭りは見たことはありませんね、あなたもご一緒ですか？それならば、ぜひお伴したいですね」

「ほんとうに約束して下さいね。わたしも何年ぶりかで故郷に帰れるし、姥神様にもお会いできるのは、

本当に嬉しいの。父と母に会うようなもので、楽しみだわ」

「そうなんですか。ぜひともお伴させて下さい。江差に行くには、青森の三厩港から船で行くんでしょう？」

「そうよ、三厩から福島までフェリーが走っているの。三時間くらいでしょうか」

文太郎は、乗船の時間が迫ってきたので、

「じゃあお別れします。今度お会いするのを楽しみにしてきますよ」

「わたし、お手紙を差し上げます。きつと来て下さいね。待っています」

彼女はふとはじらいと淋しさの感情をこめて、小さく右手を振ってバイバイをした。

文太郎も妙に感情の波が胸に迫ってきて、恵子のそばに走りよって、右手で強く彼女の右手を握って、今度こそ階段を昇ったが、また振り返って右手をかざしてから駆け足で走ったのである。

(つづく)

自治会日誌

○印 自治会

十一月中

1日○保健科運営委員会

2日○施設交渉

5日○内海工業(株)内海勝利代表取締役社長、外2名

来訪

” ○「いまハンセン病療養所のいのちと向き合う

ゝ実態を告発する市民集会」に参加のため、

石川会長、佐藤副会長が東京へ出張(ゝ6日

帰園)

6日○大館保健所結核予防婦人会来園

7日 第二センター買い物ツアー(イトーヨーカ堂

8日 会計指導及び会計事務監査指導

(ゝ9日…大臣官房会計課)

9日○大仙地区結核予防婦人会来園

12日○第2四半期自治会会計業務監査(ゝ13日)

14日 平成24年度施設長協議会秋季総会(神戸市)

” 岩手県健康福祉部国保課慰問、一般寮入所者

との交流会(イオンタウン浪岡)

” ○自治会事務所改修工事のため、仮事務所(文

化センター)へ引越

15日 平成24年度全国国立病院長協議会・第1回総

会(神戸市)

” 全国国立病院看護部長会議及び通常総会

(神戸市)

” ○地区連絡係定例集会

16日 第66回国立病院総合医学会(ゝ17日…神戸市)

” 青森県弁護士会人権擁護委員会施設見学会

” 歌つこ広場

19日○女 八十九歳死亡 青森県出身

21日○第3回執行委員会

” ○保健科ふれあい訪問

26日○平成24年度除雪計画打ち合わせ

30日○園芸係 関谷さん、三上さん 作業終了の挨拶

来訪

十二月中

3日○除雪作業員七名 挨拶に来訪

5日 第二センターとの話し合い

6日 第一センターとの話し合い

7日 歌つこ広場

” ○第4回執行委員会

12日 中央センター二階との話し合い

12日○「真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会」

7名来訪、執行委員と懇談

〃 ○保健科ふれあい訪問

〃 ○衆議院議員総選挙等不在者投票

13日 中央センター一階との話し合い

14日 抛出制障害年金・障害基礎年金支給日

〃 ○地区連絡係定例会

16日○第46回衆議院議員総選挙及び最高裁判官国民

審査

18日○福西園長先生を送る会（中央センター多目的

ホール）

19日○年忘れお楽しみパーティー（各センター）

21日○第5回執行委員会

〃 ○聖マリア幼稚園聖劇慰問

28日○園幹部が挨拶に来訪

〃 ○御用納め

一月中

4日○離任式

〃 ○年詞交歓

9日 第一センター・中央センター一階新年会

10日 第二センター・中央センター二階新年会

〃 ○保健科運営委員会

16日○保健科ふれあい訪問

17日○甲田の裾編集局企画運営会議

18日 歌つこ広場

〃 ○地区連絡係定例会

22日○第3四半期自治会会計業務監査（～23日）

25日○第6回執行委員会

〃 ○女九十歳 死亡 山形県出身

30日○平成24年度第1～3四半期国費予算説明

31日 ふれあいの集い

人事異動

〔退官〕

園長 福西 征子

（平成24年12月31日付）

〔昇任〕

園長 川西 健登（当園副園長より）

副園長 大野 忠良（当園内科医長より）

（以上 平成25年1月1日付）

園内の出来事

○中央センター1F 文化祭 12月6日

中央センター1Fのナースステーション前の広場を利用し、入所者が作成した「貼り絵」「染め物」「押し花」などの作品を展示。
また、昼食時にはミニのつけ丼やステーキなどのバイキングコーナーも準備され、思い思いに文化祭を楽しみました。



国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で104年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園 長 川 西 健 登

保有敷地 二三〇、五四八平方米
(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方米
(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方米
(一〇、九二〇坪)

交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車

(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車

(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石

行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より(車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園(1km)と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館(2km)等があります。

発行所

財団法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八―〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話(017)(788)〇一四五・〇一四六

発行人 川 西 健 登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話(017)(775)一四三一番